新板

飛彈匠物語

一

ヘ13
3035
1

かしこきあまつ国より出たるをむかしよりためしなく。ないたくみ
人のたくみをとりて。世にひびく人のそのわざはつき
のしるすところで名みなしを此ごろ北斎のぬし
そのさまをうつしきこゆるは物せよとあるに。
さてひいなかたにてかゝせてほしてしくやと。
かのひな筆をとりつゝよろこびのおもむきなしひだ人の
たくみのこともいひ。おかしくまたさるあるを
さてこそまた書きつゞりぬ。すべて此むねやしるし

六樹園飯盛著

斐陀匠物語

全部六冊

葛飾北齋畫

へ13 3035 1-6

へ 13 3035 巻 1

よこなまりさしびたるをもてあそびつゝつきづきし
きこゆることもおほかめれど、たゞ志ばし寺(でら)の
ゆゑよしをさへ志らでさみ志かしたまへるは
いそのかみふりにし代(よ)よりひゞきつたへる物語(ものがたり)
なかりし。今(いま)おほやけどのうちなる芝浦(しばうら)とよぶ所(ところ)の
あるじ。此(この)さはばかりのなどやうやしさく
おもてハ例(れい)のひがおもひをのせてあやな
くるほかの人(びと)みそなはんかし。此(この)さしよくて

みそのうち。まてるをききあかしたまひてなほ紙
だにくやかしこきるのおもふにも。心(こころ)をいまって
たゞ昔をもつくるとひがおもひく。かゝやかし
くもおもひゆへよしとてまつりをこづくる人(ひと)こそ
あらまほしけれ。さるハなべのみかゝさてもあそ
ありけん甚法師(なまぐさぼうし)がせまりしをも。えしらぬ人(ひと)の
ことゞもなるべし

六樹園

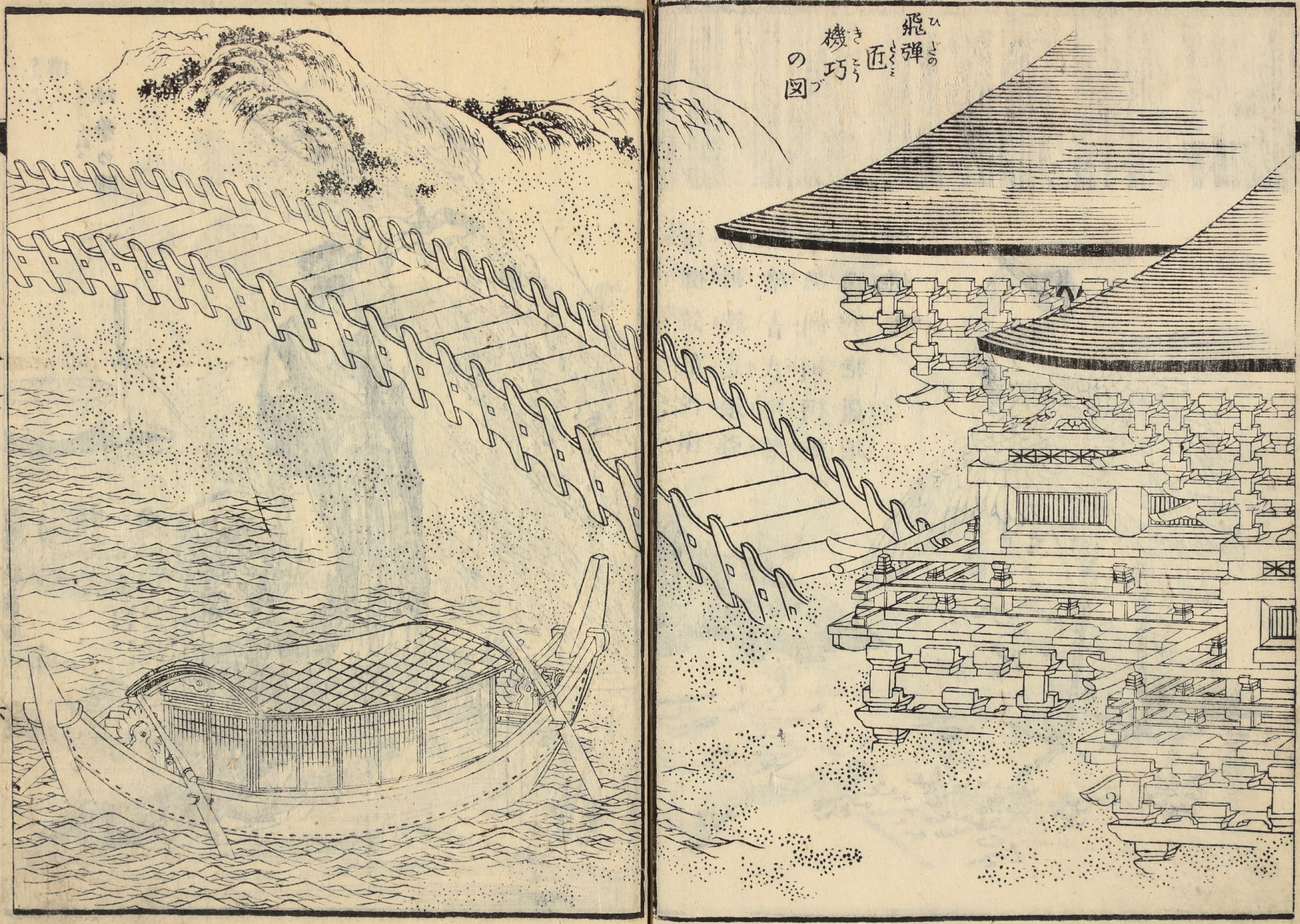
更科日記云 菅原孝標朝臣の女の筆なり孝標ハ菅原道真公五代の孫なり いかなるところぞとゝへバこれハむかしへたけしばといふさかなり国の人のありけるを火たき屋の火たく衛士にさしたてまつりたりけるに御まへの庭をはくとてなどやくるしきめを見るらんわが国に七つ三つつくりすゑたる酒つぼにさしわたしたるひたえのひさごの南風ふけバ北になびき北風ふけバ南になびき西ふけバ東になびき東ふけバ西になびくを見でかくてあるよとひとりごちつぶやきけるを其ときの帝の御むすめいみじうかしづかれたまふたゞひとりみすのきはにたち出たまひてはしらによりかゝりて御らんずるに此をのこのかくひとりごつをいとあはれにいかなるひさごのいかになびくならんといとゆかしくおぼされければみすをおしあげてあのをのこおちよれとめしければかしこまりてかうらんのつらにまゐりたりければいひつること今ひとかへりわれにいひてきかせよとおほせられければさかつぼのことを今ひとかへり申ければわれゐてゆきて

みせよさいふやうありとおほせられけれバかしこくおそろしとおもひけれどさるべきにやありけん負たてまつりてくだるにろんなく人追てくらんとおもひてその夜勢多の橋のもとに此宮をすゑたてまつりて勢多のはしをひと間ばかりこぼちてそれをとびこえて此宮をかきおひたてまつりて七日七夜といふにむさしの国にいきつきにけり　云々　いさんかゝあつて。のぼりて御門にかくなんありつると奏しければいふかひなしそのをのこをつみしても今はこの宮をとりかへしみやこにかへしたてまつるべきにもあらずたけしばのをのこにいけらん世のかぎりむさしの国をあづけとらせておほやけごともなさせじたゞ宮にその国をあづけたてまつらせ給ふよしの宣旨くだりにけれバ此家を内裏のごとくつくりてすませたてまつりける家を宮などうせ給ひにければ寺になしたるを竹芝寺といふなり　云々　○按ずるに此たけしばの故事をまうせる物[illegible]見ゆいまだこゝに及ばず将門記に郡司武蔵武芝といふ者あり是がすゑなどにや

目録

きみかた
本文墨縄が匠の道に修練せる事をあらはす
蓬莱の山
墨縄仙界にいりて道の奥をきはめてかへる事を
しるせり
たけしば
山人花見に出て廣岡が狼藉にあひしより墨なは
山人とはじめて對面せる事までをしるせり
ひろをり
廣岡姫をとらへ来て殺さんとするを松光たすけて
おとしやるまで
いしずゑ
船主が娘山人をしたふ事
うきふね
飛騨の匠がつくれる舟おのれとはしる事 舟の綱
きれて山人むすめを見うしなふ事
よわれ君
船主山人を婿にせんといひしは後に出家せるまでを
しるせり
夢のたゞち
帝の御むすめ女一の宮ひるねの御夢に山人にあひたまひて
より恋わづらひせさせ給ふ事をしるせり
都のぼり
墨縄山人猪のゆくへをたづねわびてとらへられんとするを
たすくる事
びさめんてん
墨縄再び山人と藝道を試る事 墨縄がたくみなるびさ
もんてん帝の御悩をのがしたまふ事
よゐの法師
山人ふるさとの闇がめのひさごの事をいひ出してふしぎな
るわざを女一の宮ほらんじておどろかせさせ給ふ上
より山人姫宮の御もとへしのびかよひてちぎり
かはしたまふまでをしるせり
せうたそし
山人姫宮をぬすみ出して修行者をたぶらかす事
松光さとの猫の板をひきさきて修行者を迷はす事
かへる猫
山人松光猪の宿にてよく寝させてびとくしろかはきてせめ
さいなまるゝをしのぎて命たすかる事
なぐろ車
山人夫婦ふたゝび都にのぼりゆく事 つけたり 寺
の法師おこすふみ 墨縄山人姫宮御つれ
仙となりてかへりゆくをしるせり

妸ノ抬タ
羅ラ斯レ枳キ。
偉ヰ儺ナ謎ベ能ノ陀タ俱ク
弥ミ。柯カ該ケ志シ須ス弥ミ
儺ノ皤ケ。旨シ我ガ那ナ瞽ク
摩バ。抬タ例レ柯カ柯カ該ケ
武ム預ヨ。婀ア抬タ羅ラ須ス
弥ミ儺ナ皤ハ
飛弾の匠


飛弾匠機巧の図

僊人煉藥の圖

斐陀匠物語巻之一

○すみなは

斐陀の匠とは人ひとりの名にはあらずといふ。飛騨国よりは庸調をたてまつらず里ごとに匠丁十人を出しておほやけの造営をはらしめいとなミしなり貞観の比ハ一国より百人をめさせて朝堂院神泉苑などつくらせたまふ事國史に載たり今とても志るしつたふはあまたありし飛騨人の中にすぐれて機巧にたくみにして其術神に通じて天地造化の不可思議なるをもうつし彫鑿のわざに生し木頭を以て鳥となし板片を以て馬をつくりて一世の人を驚かせしがむかし匠夫が物語なりその時代ハたしかならずいづれの御時にかありけん斐陀の国に猪名部の墨縄といふ者ありけり父母ハはやくなくなりておのれ一人ぞ住ける此国のならひなれバ田かへし耜いとなみなく鋸鑿をとりてひとしく工匠の業をならひけるが人にすぐれてめでたくつくりなしたれば老工の輩もことごとく感服して真の良工なりとほめのゝしりける墨縄ますます精神をこらし修錬しければ今ハ左右なき此道の親となりぬあるハ鶏をつくれバ世の鶏これを見て両翼をひろげて飛かゝり鼠をつくれバ猫きそつてこれを捕りなどしてさながら生たるあとかもありければ遠近をいはず人これを慕ひて調度玩器の具などたのみにおくる者門前に市をなしけるされど心まがれるもの又権勢を以てもとむる者にハふつに眷へずして貧人老夫などのあつらへをいなまずていふ侭に作りてぞあたへける其比郡司にて紀の武俊といふ者あり慈悲のこゝろなく財を貪りて常に農民など

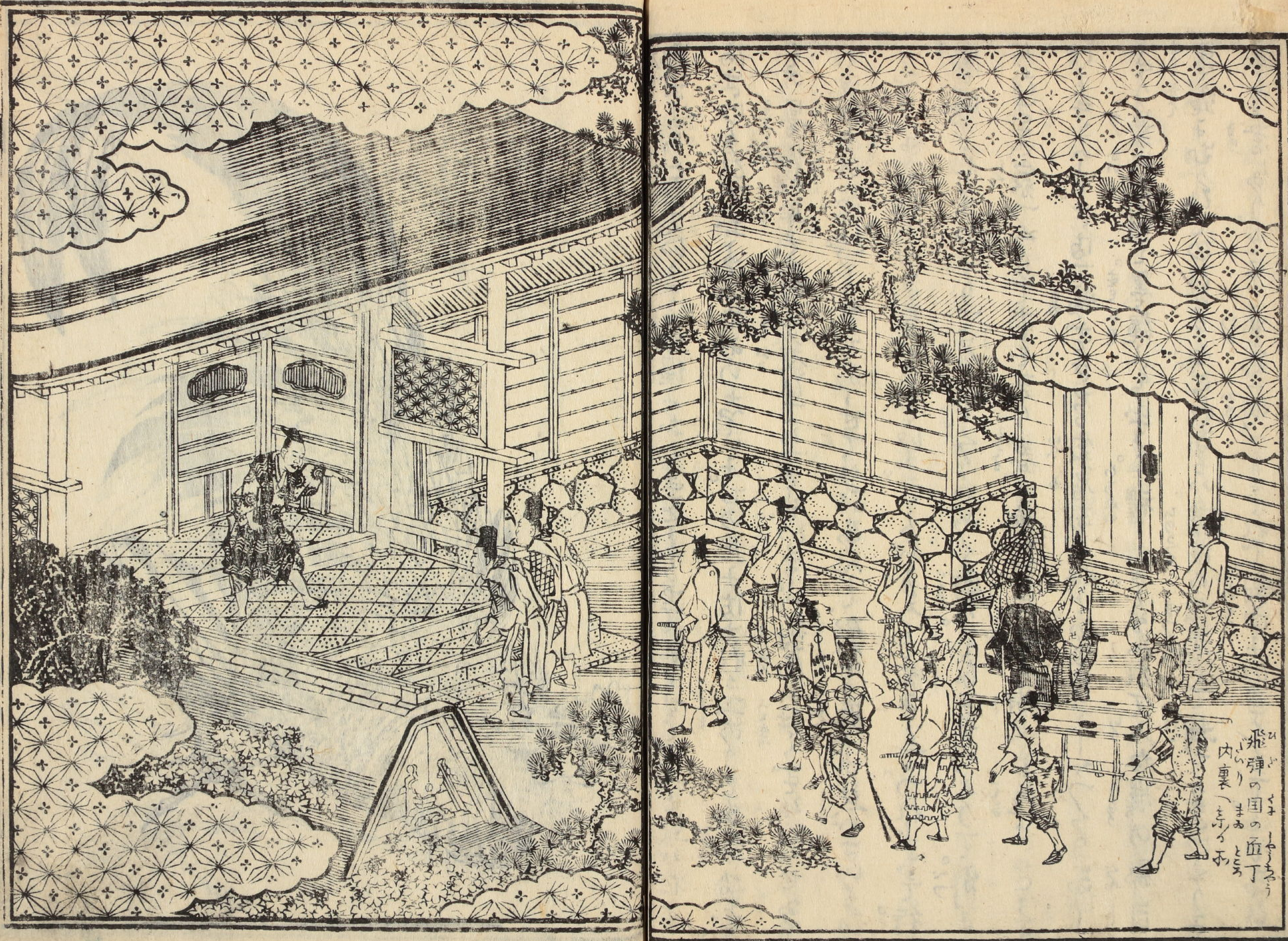
かくてあまたどりてほしいまゝにぞふるまひける此武俊酒を好て飲ながら盃ひとつを墨縄に作らせんとて従者をもていひおこしけるを墨縄常にかれが悪行をふくみをりければとみにもつくらで日を経しけるに武俊いらだちてこの小冠者め郡司をもおそれずかく使をかへす何事ぞ思ざるにもてなすこそ奇怪なれとて従者どもにいひつけてしかくからめてこよといひつけてやりつ。従者ら墨縄が門の前にいたりて大勢にいひけるは郡司のめさるゝぞとく出よとおびやかしけれども返答さらざれば鞋のまゝ内らにかけのぼりて障子ひきあけていらんとするにいかにつくり置けん障子おしあくるとそのまゝ従者どもをふみたをしける残りたるものさらさらにくゞりて五人の従者どもことごとく床の下に落いりぬ床の下は堀たる穴をほりて何ほどなればのぼるべきやうもなし。はじめのいきほひにも似ずて犬におそれてなきてそらをあふぎていひけるは過て無禮をいたせしは主郡司のいひつけにていかで命たすけ給へなんと声々にわめく其時墨縄が声にてからからとわらひて階子をおろしければこれにとりつきて上りきてならびて墨縄が前に手をつきていひけるは汝等郡司のめしによりてきたるは罪なくゆるすにいかなるわざをうけけるか。あなたははやくかへりてこのことをいひて問ひなばさらばがくしたまはるへきとて赦をせ給へとの給へど墨縄がいかなく思ひ入りしとおもへどもそこにもちの思ふ心ざしなれどよしさらばゆきてんとてさまさまにこしらへてあゆめど従者らはよろこびてあまたして郡司をひろにいたりて墨縄を見て眼を大きくなし額に青すぢをあらはしてふかく墨縄に坐につきて何事のいてかく火急にはめしまゐらするぞといへば郡司いきまきて

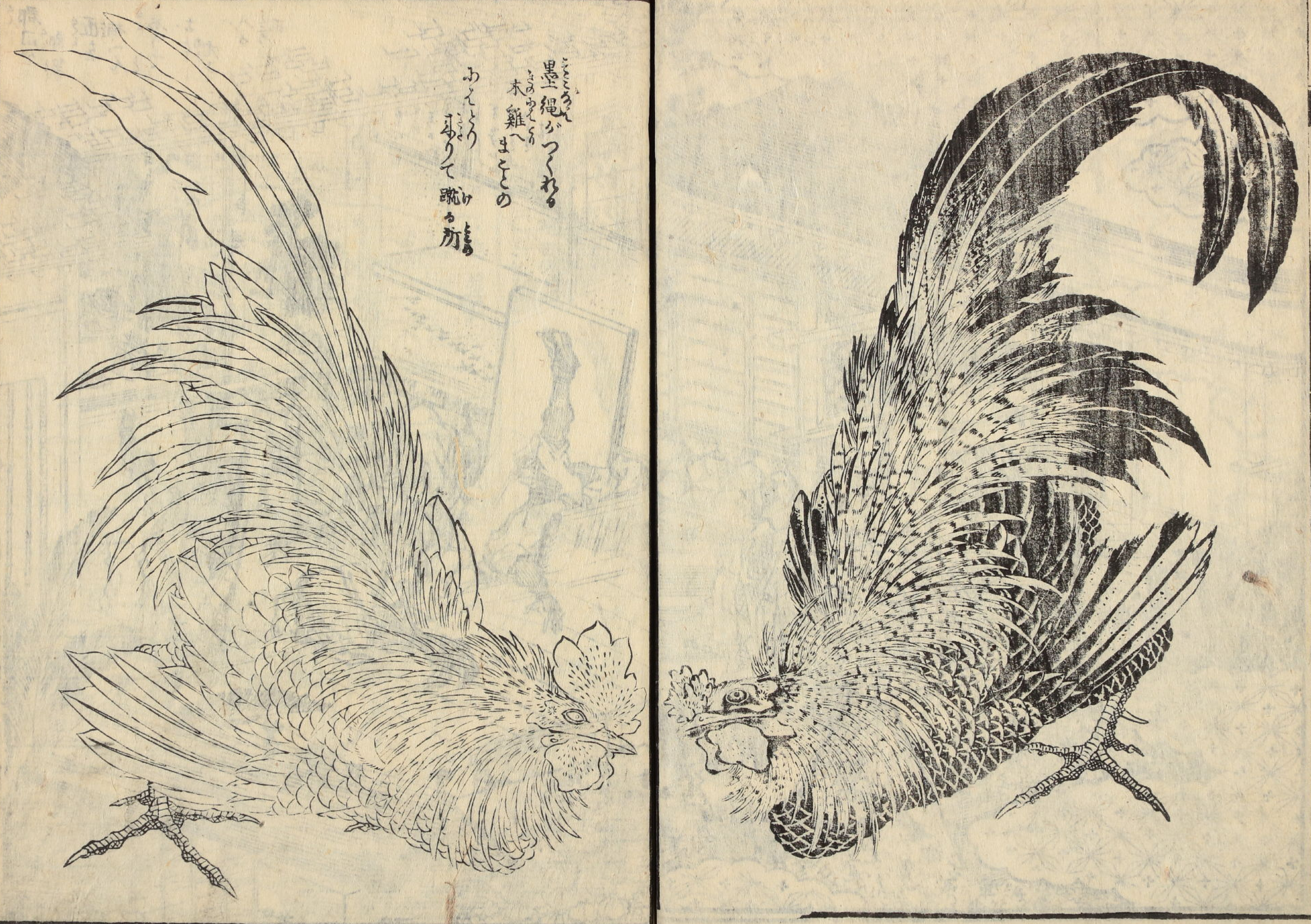
我おもへくやりし盃月をうかまど作り出で汝郡司をばいかなるものと
思ひてさやうにおなづりざるにはあてなさぞいでおのれが志やうらお
そりてそれをみんとてつかくとよらんとす墨縄をとこうよりけるみ
くる物とり出てうちさゝげてめとめさせかふ盃ハこれにおのれに恥
見せなんぶ盃ハ汁不生しうちやりきてゆなんといへで郡司ますし顔を
なゑしてさてハ盃ハとくつくりなりとやさらバそれつくれる料にけひと
こぶしハあるしつらのまちありといひて盃をみとりでかさねて我いひつるん
事をさなゑざりしにおもせぞめに物を見せんぞるぞ今ハ用なしとくかへれ
といひて墨縄をおもき出しやりて盃をよくくゑておきにかしこく作り
てくりとくともなふんだ見てみるるにあきりかゝとあるの郡の郡司の
来りなるを生居にとほして物語して後かの盃とり出てあるて今

よどめてえうる物にてゆとまにて酒ぞよう釜くせんとて出て酒とり出
してまでむとて先おのれ盃手にとまてめのいちハにつがせなるにいうあり
ふう汁盃おそらにおめくありてみとくりをなちておとし入れぞめの
わくをとらち去りつゝ又盃を手にとりて酒つがせなるに石などを
あちこちへこうちせうまてえものにふえで又うちかさふけてなまぞ酒
ほどなしに至てとなぬまに客なる郡司もおどろきて同じく取あげて
酒つがさるに盃かしむきて酒ハみなこぼれぬ左右の手にあちこち酒を
つがせなまで酒をいるまで盃おのれとさかさまにかへりぬ力を手にいれて
いかでかさむなどとかまふまじ大力の人の来てひきかなぐりやうなれば
心地もうまていくらびもさかさまにうちかへりなれどもあるじも客もただ
あきれてなぞおもへりなる郡司大きにおそれをなしてかやうの事を

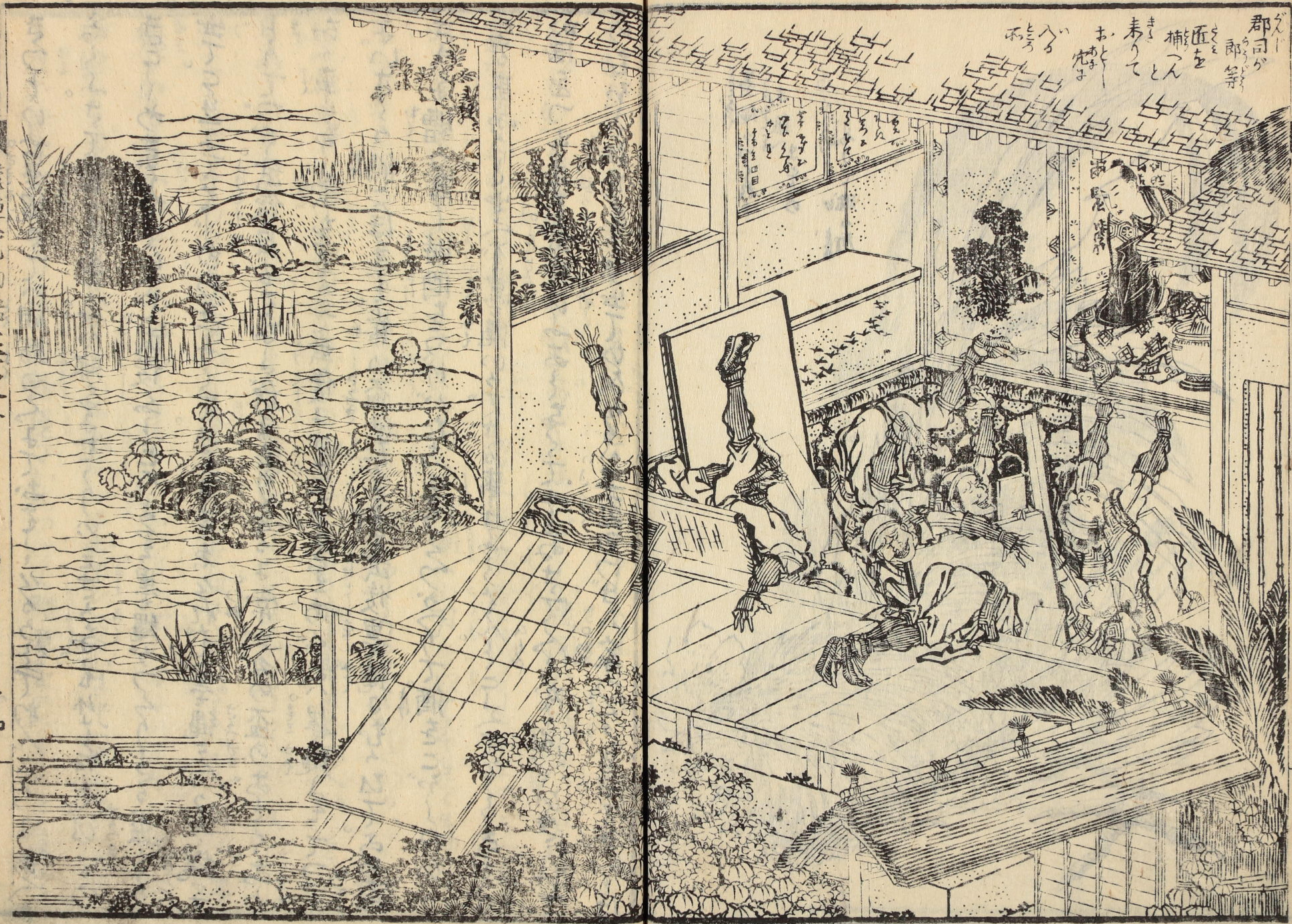
哢どてかゝる物つくりて何とつるふくさよいろ四郎等どもかれとゝへて来といへどそしめのしるしよりられど。是非ありこみして出る者なし。客の郡司いへるハ。わ主によきたくみありとあり。かゝる機関をもて作りけるを見れば。わが主も又かゝる子獻ずべきものを出してかゝるを試つべし。吾こゝろみ。檜前松光といふもの。此の國にはならびなき工なれども。がまんをとひて墨縄にあたせて甚勝劣をくらべることの。墨縄負よくんにはかれが造作の具を奪ひ付のち工の職をとゞめ申さんには。かれが弟子をかぎりなき恥に休るんといへぞ。郡司よろこびてさらばとく松光を誘て来るへと契りて其日ハ何となく一日を過して。隣の郡司一人の男を率てきつ。らちこのんバ手斧頭にて楔椎頭あり。歯を鉛子似て鼻ハ鐵槌のおとしらに。天骨をえらる道の首長とは見えず。

郡司よろこびていそぎ墨縄におくるをしらせて恥させてぬつといへバ松光何ざわらひて。およそあめのしたに。わ主に勝れる工ありとも存ぜず。その墨縄が早く名ハ吾及びてゆへども。いまだ對面ハ仕らざれバ。おもせあるとも出あひなば。つらすがからせてゆひなんとかねて思ひしに。いはゞさいひのをさりかくいふとりきをかきそくいふ。さらバわろとるにとてつれだちて行。墨縄が家とまひりてみれバ。くりやめく軒ハそなまへてつくりて。別にちひさき家つくりて其をもり。春の事なまバ庭の樹ども花さきさくけしきよしさはで物ぎきせる家居ならねど。いゝめらしくつくりなしたり。案内されば墨縄もち出て。一禮してともなひて入ぬ。隣の郡司墨縄にむかひていひけるハ。これなるハ檜前の松光とて我もちいさき子まなめる者なり。そことも業を同じうされバ。對面にいまんとてこのあひ


飛弾の国の匠丁内裏へ参る所



墨縄がつくれる木雞へまことのふとくりありて蹴る所

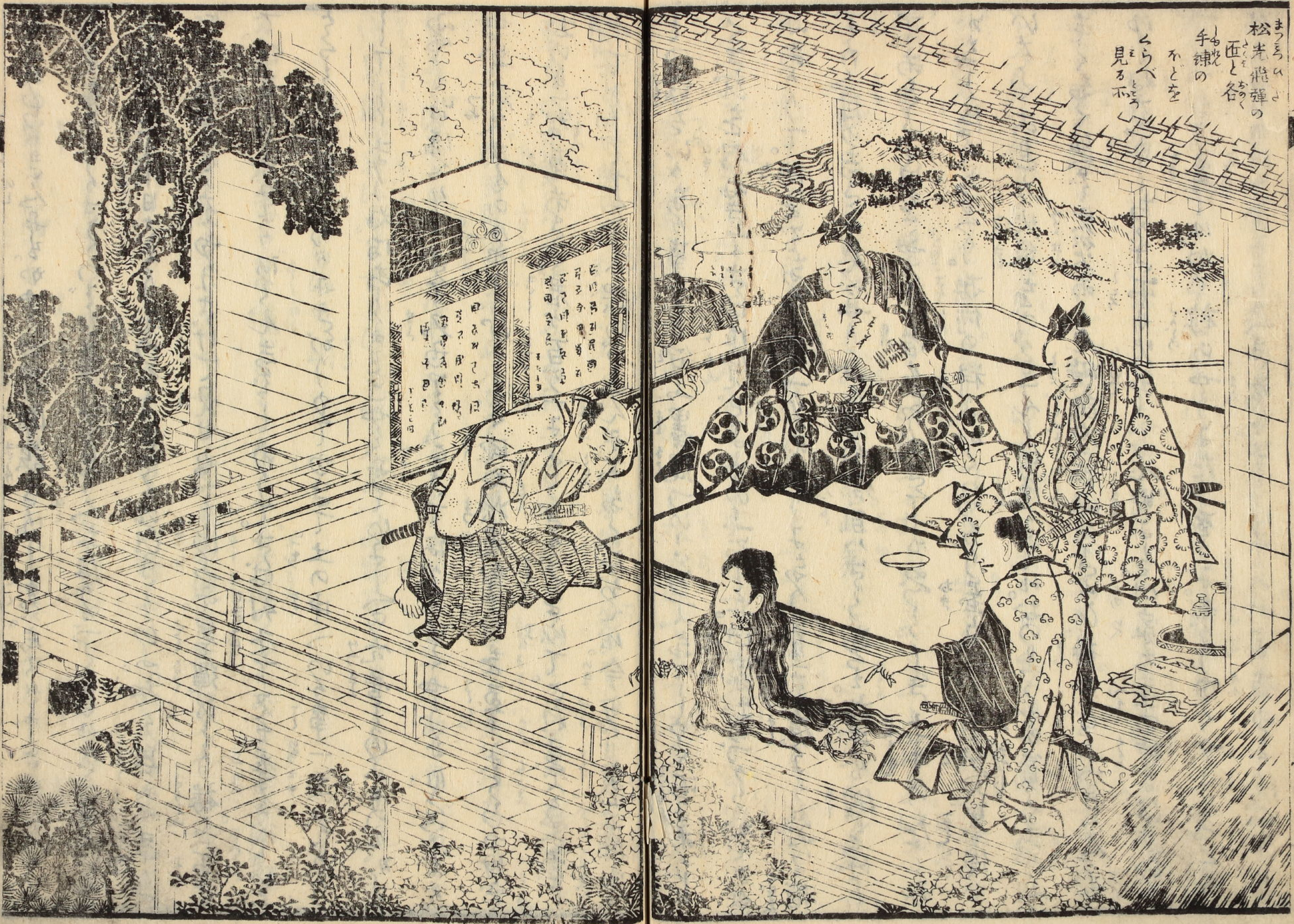

郡司が郎等匠を捕へんと来りておとし穴に入るところ

きつといふ墨縄さてハ同職の人にておはしけるらん。それんところにまへ
しらふさて盃とり出て寒郷なにむらりの、こさらなもけふねど。ひとつ
きこしめさぞやといへバ。武俊ふところより墨縄がつくりける盃とり
出てこれにてなじめらるよとてまへにすゑられバ墨縄みづから銚子
とりてつぐ武俊目もはなさずまもりゐけるに常ざまの盃のおとくさと
ある事なし。飲をはりて武俊にさすをうけあぐれバ墨縄とりてつぐ
にいさゝか酒こぼさず常の盃にたがはず。武俊墨縄にむかひてこの盃
さきに贈られし時酒をつげバたちまちくゞりて酒をこぼしぬいか
なる事ぞと問へかし墨縄いらへてさる事さふらんとこそ申てそれよあらぬ
かほをつくりけれバ武俊いふおもしろき事かなとて人がひきつけて
のむねと松光すゝみ出ていひけるハ工匠のわざハ家つくるを以て第一とは
すなり。そこはく機関をもとめて人の目をおどろかしめしときハいよくきやう
みやといへど墨縄うち笑ひてのたまふがごとく機関ハ小技なりさりながら
家をつくらん事ハ甚やすし。いかなる大厦高堂なりとも曲尺のうへを
出ざれバ未練の人もよく是をつくる。機関ハ小刀を以てすれども曲尺を
はなれて作りなせれバ尋常の拙工が類ハおもひよるまじかるべし。
いふ松光がいはくおのれも小刀の細工ハ人にまくべしやともおもはず。今
日あらかじめまかりてゆくハそこと工匠の道をくらべてまけんかたは此後
弟子となりてつかへんとまでゆひけれバ試て見なんといへバ墨
縄がいもとく人とさしろひあらそんハおのれが好む所にゆけバ此義子
おいてなるべしといふ松光心におもひけるハさてハ手やらおのれ
に及ばざるをしりて謙退にかこつけて勝負をのがれんとするなり。

とおもひて又いひけるハ稽古のためにもいへバ。ひとまづ互に手なみ
の程をみんず。くらべてもよからんといふ二人の郡司もともに催せバ墨縄せんかた
なくて。さらバ仰せにまかせてん。何事をなして勝負を定むべきといへバ
松光ふところより木にてつくりたる蟹をとり出していひけるハ是ハおのれ
多年おもひをつくしてこしらへつくりたる物なりといひさま蟹の腹なる
栂のごとき物をよくねぢて壺の上におけバ。土蟹足を動して走る
おとさながら生たる物のごとし。郡司ら奥に入てなむれど松光走りより
類して土蟹にくらぶべき物作りなせど。見せなくといふ墨縄われも都
人の所業によりて蟹をつくりてみせあへらせんとて箱ひとつとり
出して松光が前におきつ。松光蓋をとれバ蟹おのれと躍り出て走る。
人々目をつけて見るに土蟹壁をはひのぼりて泡を吹ながらみちをあけ
つゝ天井をさかさまにつたひゆく。しばしありて又壁をつたひ
下りて壺の上をはしる。墨縄箱を取て蟹の傍へさしつくれバ躍り
て箱のうちへとび入つ。さて蓋をおほひてとりをさめたれバ二人の郡司ら
あざみおどろく事大方ならず。松光まづ初めのしるしにまけぬれバやゝ
赤面しけるが。ていらぬ体にていひけるハ機関ハ小児の玩具なれバ。たくミ
なりも。世に用なし。伎を見すべしとてまねにつくりたる物をとり出てお
ひらけば。舞楽の蘭陵王の面ありけるより。おそろしく身の毛よだちて
郡司らふるひ面をむけずて墨縄くちそへて傍なるによくにらみすゑ
おのれも戯にまさまつり置たる物ゆゑこれもまねにつくりみる
物をとり出て紐ときてあけられど。いはきんたらんとおぼゆる。
申し五十ばかりとみゆる女の頭なり。何とせん。血くさき心地さへまされバ

郡司には見しらせんぞとかぶらをむきてきり。松光手にとりあげ見て。
あまハ作る物とは見えんゆゑ。まさしく女の頭にかんざしつきよう
とり出なむし。何かいましくといひてさし。置くねど墨縄がいたく。めと
よつゝ眞の頭にてぞゆるまで。おのれがつくれる木なり。内ハうつろにて。鈴
を入置たれど。ふりて見なへといふに。とりあげてふりぶりなれば。鈴の
音あらくしくありけるぞ。すぶめてつくれる物とはあらざりね。松光さずがに
張ぶりなしひなる男なれども此細工におどろきて。とてもかゝる此者の
上に立がたしと思ひより。扨いひけるハ此家ハそと一人してつくりなるや。
わかきたすけつくれる工匠もゆひきやと。墨縄がいらく。かだり
ちひさき家ひとつつくらんに。人の手をかるでも存れませず。但これを
楼にて常の家にちはすまでといふを。松光いぶかりて。ちまたを楼なく

との経をいふなる事なしと官に墨縄つい立ちて。なかしめく所にありし
くさびを引ぬきて。さば御覧ぜよといふほどに此家おのづからかたぶき
にあがりて。地をさがる事一丈あまりにありぬるをだに。庭にしなんたる栫
どのゝ目のまへ見る世にありぬ。郡司ハさらつなきま。松光も膽をけし
て。おきる口をふさぐ者もなし。さてもめづらしき上手のたくみ
かなとほめあへり。扨何の料にかくハつくり置給ひしと問ば。墨縄が
いふやう。あまる火災をのがるゝの為にてハ。おのれが家窗くらく人
さてなくいふぞ火災あらん時。調度衣服のたぐひ持はこぶべき人も
ゆきねだらめし。ちりきなれ火出らん時に此家を土の中にひき入る
づくつくり置てハ。かく楼の世ならず。あがりゆくやうまづつくり
ゆち夏の比まつみるべき為に。まつけてハ此家夜のまに


松光飛騨の匠と各手錬のわざをくらべ見る所

あまりちかき人にもかゝるの機関談うりし事ハしらせやさ哉。めし人
あるかなぞうるさくつどひ来りて見る人あまたるべく夜乃み
ひとりして十日ばかりかつくりてゆひきといふ竹も奥ある事なさ
こそいへぞうだちありさげて見せなへといふに墨縄ひとり楼を下ろ
て何某をまつるみかにらん志ぞしありてさば引下て此をなんといふ
ものは又此楼まんづゝにさがりありて土の中ついる事一丈ばかり
してとぞまりぬ甚あやしとこ母にていまへの完居るいふものか
ゆかしとおぼへけり。さて又母なりてながりてあやうみ見へしが
ありて常さるの家とむしく成ぬ松光かしらを忍びよりつけて
おのれ智恵あさく君が百が一にもおよばざる才を以てとれまでしらるごと
やてそもしすやせしハ深のがれん事ならくおそれハ今より御

弟子と成て道の修行仕りたくといふ墨縄うち笑ひておのれ人を教ふる
ばかりの才覚ハなけれど。吾の能上ハさとりあきらめたる程の事ハ教へまいり
てんといふ。郡司武俊もえらめハ喜びて来りなるが墨縄が業の巧なるに心
を寄て甚あやしみ人にはあらざりけりとて舌をまきてぞ帰りける。それより
後墨縄が名いよく世にひゞきて人志らぬ者なかりけるとぞ

○ほうらいの山

それより松光も墨縄がもとにありて其道のおくある事どもの伝をならひ
ひとく他事なくたのしみてぞつかへける。ある日墨縄良材をえんとて松光を
ともなひとく山に入るに道にまよひとく山路ふかくわけ入りけるに
きりきしそびへて下ハ千仞もあらんとおぼえける谷ある所に出ぬ
むかひの岸を見わたせば三間ばかり隔たれどわたりゆくべき道もなし。

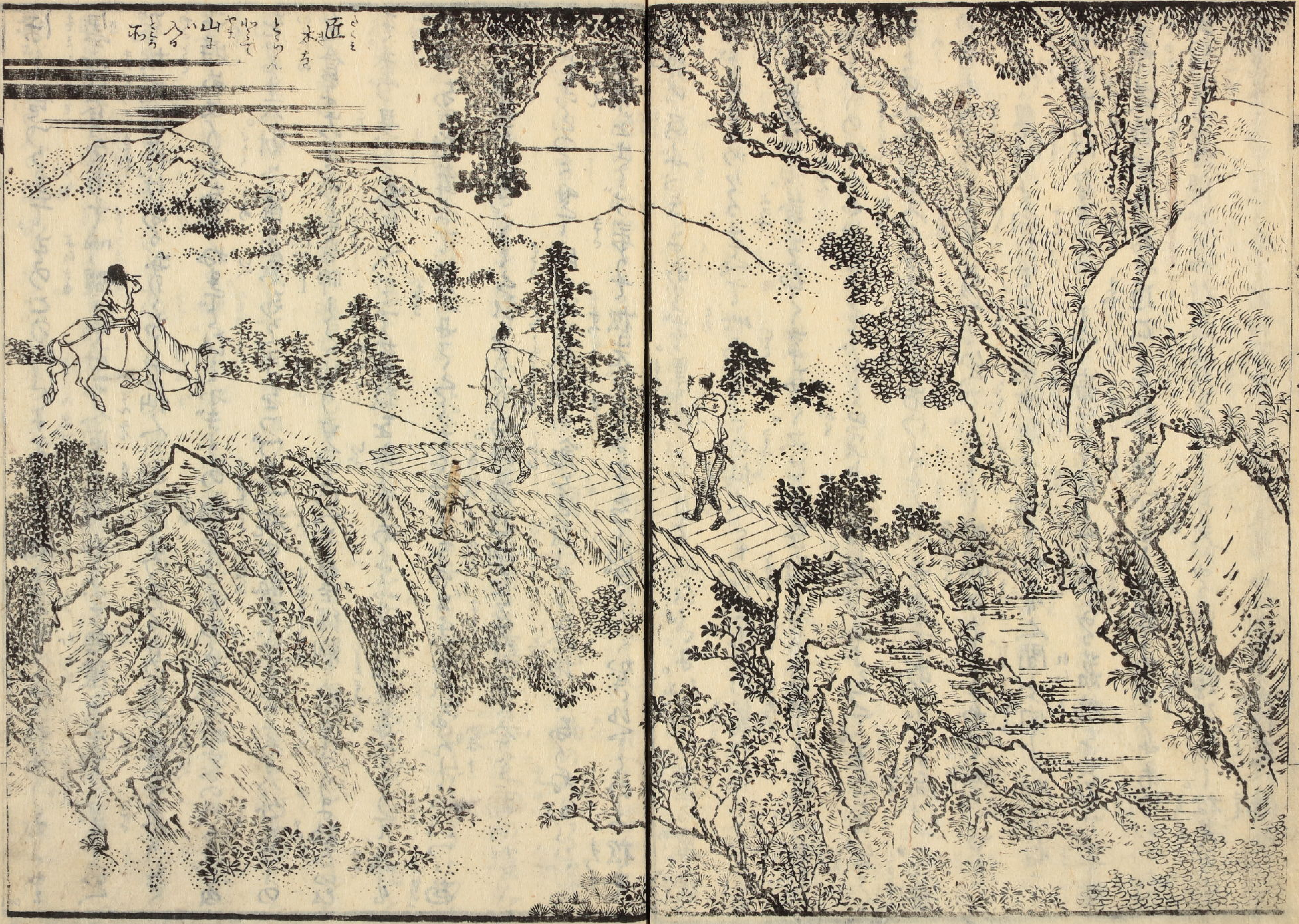
しらゐふむらひの岸に年を経たるまきの木をきりて、かまへを伐りとり
よくくは工にまかせる良材あるべしと松光がいへば、墨縄もげにも
さおもふなり。いで此谷に橋うちわたしてんとて、松光に負せたるつゝみ
とりてひきあけず、中よりさまざまのちいさき物いくらともなく入おきたり。
それをつぎあはせつゝ、まづ階子のやうなるかたちとなりぬ。墨縄かの
はしごやうの物をとりて、むらひの谷へむけて、はしの方をあげ、
ひとつのかけはしとなりぬ。我子つゞきてわたるべしといへば、松光
さりげもちて行くに、大方あやふき事なし。げに山路にかゝる物こそ
用をなしつべしとて、松光いよよ墨縄が用意をぞほめける。さて打わたりて
かのまきのもとにいたりたるに、あまりにつかれたれば、樹の根に
しばしうちかけてやすむほどに、かなたにて笛の声きこゆ。かゝる深山に

何ものゝ入来りけんとて、あやしみをるほどに、草刈わらはの十ばかりなるが
籠を背におひて笛ふきならしつゝ来り、墨縄をみてかしこまるを
とくみと聞えたる猪名部の墨縄ぬしにおはしますやといふ。墨縄かく
童のいふぞ、わが名を知りたるはなにゆゑぞとふしぎがりていへば、
童がいふやう、此奥山にすめる人あり。そを待ぬる事ひさし。今日こゝに
入来りぬらんとあれバ、あの主に先行むかひて其由告しらせまゐら
せよとて、笛のしるしして此道を折まげてまねきたるぞかし。志て到り
たまひなん。おのれは草を刈て後跡よりまゐらんずれバ、ともなひ往がたし
といふ。墨縄心得られず、其童のいふ人ぞいかなる所方
ゆかしけれど、童まづかしこに行く。其子細はたづねもせで、ひきつれて又笛
うちふきつゝ山をさして行ぬ。松光がいはく、かゝる深山に人すむ

道理なし一定僊人なといふものなるべしといふ術ともあるいざ行て見んとて墨縄さきにたちて行く所々熊狼など見ゆれどもみな耳尾をたれてむかふ事なし。摠山をのぼり谷をこえて行に松柏しげりたる中に大きなる門見ゆ。ちかづきて見ればとびらハ金をのべて作りて尾ハ玉を以てかざりたり。墨縄松光ともに驚きて此山中にかゝる家居ありとも夢及ばざりしとてしばしながめゐるにとびらおのづから開て白翁のいと老たりとみゆるが出来り墨縄に向ひてなんぢがきたるを待なりしぞとてまねきける。何ともおそろしき心地すれどもそゞろびくまゝに従ひていれバ中門あり。其美華なる事いふべくもあらず。松光をバこゝにありて待べしといひて墨縄ばかりをともなひて入りぬ。出居とおぼしき所に坐しさせけれバおくの方より嶺の音して出る人あり。頭をあげて見れば鬢鬚ハ白銀の針をならべるごとく見ゆれどもかんばせハはたちばかりの人のごとし。しろき冠に朱の衣を着たり。そのさま凡人とハ見えざれバ墨縄おそろしく頭をさげて拝すれバあるじ墨縄がそばちかく坐して汝おそるゝ事なかれ此所ハ東海の蓬莱山なりよのつねの人ハ来りいたる事あたはざれども汝仙縁あるによりて今日こゝにむかへつといふ。墨縄いよいよおぢかしこまりてをりければ童子等酒さかなのたぐひを手ごとに携へ出て墨縄が前にすゆる。翁かの童子を指さしていへるハ。これは人間にいはゆる不死不老の仙薬なり。汝一杯を飲べしといふ。墨縄おそろしくもうれしくて盃をとれバ童子壺を傾けてつぐ。口によせて見れバ其香気ことにして人間の酒にまさりてありぬれバ飲をはりぬれバ心神自然とさはやかになり體かろくなり

てさながら仙となれる心地せり。何じいつるハ汝眞仙となるにハ今
七十年をすぐるを待て。但汝が匠の道ハかしこきゆゑにかく呼迎へ
しか今夜を過しなバ汝を帰すべし。まづあなたに来りて墨
縄を誘ひて庭におりて小き門をあけて一町ばかり出けるにかしこに亦
ひとつの門ありて斧の音鋸の響かしましく空にみちひびきわたりて
見れバ仙人あまたあつまりて材木をあつかひてをり墨縄ハ何の
料にかく営べきなりといひて仙官ハはじめ作れるまゝに永世不朽
にて作りかゆる事ハなし。これハ玄々皇帝命ありて某に仰せて此度
蓬莱宮の別殿をまうけつくらせ給ふなり。よく目をとゞめてくはしくこの
所作を見るべしと教ふ。墨縄もち守りゐるにまづ人間にまさる所は
異なく人力にて作らんには八日ばかりを経て成べき物を一夜に作り出せるさま

凡夫の及ぶべきにあらず。墨縄もち見るあひだにいよいよ道の奥儀
をさとりえたるさまで此あまたの仙人たち何かしの翁の許へあつま
み。おこなひて萬の事なく工を教ふる事も甚しければけあらず。
あまたの仙人ハおそれぞれ思ひよりぬ。扨つまびらかにしてそこを出て
もとの小門を入るに童子あわたゞしく走来てあるじに向ひて火急
の召ありと告れバあるじいそぎ巾服をあらためて出ていまだ
とて墨縄に向ひて思ふに汝飢ぬらん。仙界人間と同じかるべき
食膳を設くるものなしとて童子に命じて庭なる茘枝をとりて墨縄
にあたへ我帰り来る迄ここに在て待てといひてのどかに出ぬ。
出行る墨縄此茘枝をくらひみるに甘美なること類ひなし。松光を
あまたをえさせてんと思ひて中門の方へ出て見るに松光ハ待ぬる


匠木をとらんとて山に入る所

ほどに倦つかれてきのこのかさによりて眠まへしてねふりけるを
墨縄将せを曳て呼醒して汝は人間と同じからず無礼をすべからずといへ
ば松光不興げなる面もちにて仙人は物をしみするものや家に来りて
二時ばかりになりぬれどもひとかぎりの飯をだにあたへず此家のつくりざま
を見れバ財に富る家なるべきをけづり一椀の飯をだにあたへざるハ心なしの
乞食にあそあれ吾師とく帰りたまへといへば墨縄制して汝ぐちに物ないひ
そまづ是を食へとて茘枝を出してあたへけれバ松光手にとりておもへらく
大きなる椎茸にて生にてくらふともはらをやそこなはんといひつゝ物
わらひでむさくとくらひをはりぬ此茘枝咽をとほるまで今まで一物のほしかり
かりしもこゝに至て腹の中七八椀の飯をくらひしほどの心地となりぬかくて
仙童膳をさゝげ来りて松光が前にすゑていざとく食したまへといふに松光

墨縄に向ひて此はかきゆゑの中に何事にてはあらんと言へば墨縄汝は
物くらふ事ならぬに松光眉をちゞめ頭をふりていかで物のくらはざるべき
腹は鼓のやうになりてはりさけんとす仙童の云此男は人間の食を
あまりにくらふゆゑにやさしみてはだまされかくまゐらせたるなりとぞ
松光さらばならひて後にこそたらべゆるされよとてはらひ出てかの菓と飯を
うちあけつれば仙童は膳をもちておくへ入りぬ墨縄此ほどにて身をあの
あたりのくらしき見んとて松光をつれて門を出て道ある方を行に樹ごとに
玉をつらねしごとく砂はことごとく金銀の色なりふしぎにたぐひなかりけ
あき心地にてこなたに高き築土ありて門ひらきたる所あり庭をとほりて入りさく
見ればいと男女の往来多かりしが是ぞ垣のきは間より見れバ貴人と
おぼしき人の威ありてたけだけしきが簾の内に在り左右に官人とおぼしき

人々列を正しくして坐しなり。階下に男女二人をまねき置ていろいろ罵ておはしぬ。耳をつけてきけば。貴人のいふやう汝らひそかに夫婦となりて仙都の掟にそむきしより。しかしながら塵縁のつきざる所以なりともさてくすまに今より汝らを欲界に下して夫婦となさしめん業つきたらん時はふたゝび此所へむかへてんとのたまへば男女の僊人さしうつむきてひくゝしてなげき泣まづことをろさなり。墨縄まさしくふしぎに思ひて此男女を見れば。うつくしくたとへの貌あいきやうこぼるゝ計なれば誠に美人とはかゝる人をこそいふべくみゆるうち思ひたるに。貴人顚をうごかしてかしこなる人に目くばせすれば。かしこの人立てあまたの瓢をとり出て貴人の前におきつ。あのかたはらの人を見れば。まさしく我をむかへしたる所の翁なり。さてそめしありしそ出あひしなるにハこゝに来たりてあり。しかし思ひよりぬ。貴人又いはく

此ひさごの瓢ハ汝らにひとつづゝあたふるなり。元縁つきなん時ハひとつびとつ持帰るべし。生れ出ん所は南瞻部州大日本國の中にて女ハ貴族の家に生るべし。男ハ東国の賤き民にてあるべしとおほせらるゝその声のうち庭にある仙卒立あがりて二人の男女の手をとりて左右にわかちて引さりて行く女をば西の嶺のかたにひき行くさまなり。男をば墨縄が覗きゐたる方へひきつれて出きぬ。墨縄松光もおそろしければかたへの樹のかげにかくれゐたるに。仙卒とく是を見つけて一人走り来て汝等いかなる者ぞと瞻ぬとく此所には入きつるぞといふに。墨縄地にひざまづいてしかじかと朱衣を着たる老僊の家に今まで留りたる者なり。ゆるさせたまへといひつゝ手を額にあてゝおがめば僊卒うちわらひて汝等此所に来たる事我よく魯仙の物語にて知りぬ。汝等ハ制外の凡俗なれバいづかたに入り来るとも

魯般仙人
匠の道の奥儀を
墨縄に伝へ
故郷へかへ
らんとする所

登山の高なしといふ此言を聞て墨縄松光も太子心おちつきてかの仙人にうち
のりそひて行て見ばやと思ひ出きぬ仙卒等ハかの美男子の左右の手
をとりて空にまひ上りひき行さるにあまりにいとほしかりけれバ墨縄まろみ
出て見れバかの岩手の方を召なりて来らずやといへバ仙卒ら汝慈悲の心あり
殊勝なるをさらずかならず召覧させよとて岩手ノ人を墨縄ニおもむかへ其時松
光其陰瓢ハおのれ持て来るべしとて手にとりて中の母たちる此瓢といふハ
瓶のかたちして上に鎖をつなぎ蓋ある石中やおかしん其質ハあまりかたからねど
いとかろき物なり松光一人の仙人に向ひて此瓢ハ何のために用ゆる物ぞとゆ
と宣へバかの仙人答て云けるは仙界にて金丹といふ薬を錬事あつてこれをこ
汝なとがしき凡俗にてしる此薬をのぞきたぶちに納るなるはこの
薬を錬るなる九三百年なるを経ざれバ丹となるまでなれバかの男女の

仙人此金丹を錬り作るべき役を蒙りてありながらひさしく戒を犯して悲び
あひけるに此稀に金丹などをまもりて雨も鳥子のなる事なし丹薬ハ
佗かかなく成就せざるの瓢にいりてたくはふべきをかの男女法を犯ねバ
かく仙界をおひ出さるなり松光聞て毎ハ大切の薬をいれて瓢にせしあを
いへ衛しててかの男女に此瓢をあづけなバふたりともに空に仙人あはらるさく青えく
宜ふ男女に此瓢をかたらかば人間に胎を宿しておちてさてふたたび此仙界へ帰く
あまへん時つらちなく此瓢を持来らずんば仙人にあらなる事あたはじ此瓢に
いさらの痛ぶえつきてもそのの位の仙人となりがたしといふ松光我故郷
にてハかかる瓢には炭炭団などをきあつて備へしかぞくりの物をとぢぬ仙界にし
は大事となのふるやといひておどろきぬさて一里あまり行るにかぎらり
もなき高き山にいつつかゐて登るる空をおろさせけるに若き人ら

しばし有て物をもいはで居たりしが。いとよくまもるに墨縄松光も目をそばだて守り
なほ生ずる仙草等かのわき人をかけちにみゐて行きてはしばしいひさる谷の下へ
つきおとしぬ。いくちひろともしれざる。みさにあはずして微塵となりて死し
ぬ。かくて墨縄ハいとほしさにおもひつゝ彼松光が手に持たる瓢をさゝげて
志まハいかにもせんずるやと仙人も驚きて此瓢ハかまへ舟にのせつかハす
つきをも不便なる事ともしるかなをおのゝく怖しるさるなり。墨縄が
いそく今のねがひおもしろきぬきよくわかるべしといへばくもあざ笑ひて。
かれ谷をさけるよりもはやく人間に胎をやどしぬ。今ハかれ凡人と成り生を
かへぬれバ真仙の道術もせね。此瓢あげやりたりとも彼が身に到るまじ
かし。これハとて命令をむきなる罪きり不道しと各額をあつめて
悔ども墨縄らいとゞくやくも凡界にまかせとかへせしかの人の行方を

尋ねて此瓢をさゝげもてゆかんハいかにとのつでおのく手をうちて是ハひとへに我
汝にまかせてん。いまく神通を以てかれが身に到らんハやすからねど仙界に旋
ありてわかれいまし人間にいける事をいましめらる。まだたやすく行ける事
かなし。おなじく此にひとつさとしておきといふ墨縄かの瓢を包みてみづから負
て仙人にいとま松光をつまて山をおりてかの老仙の家をさして帰りしが
翁出居に待つけをりて汝山はいかにして瓢をうけとりて帰りきたるらんと
いはるかくきくとなりねば所のまゝに事のさまを述べくはしくかたるほどに
つきさぎさしふん。汝霊界に伺るたがひなくかの人にはやくつかはすべし
めしたりて天授にたちたるなる禍あるべしとへば墨縄ハいでてるむき
まうんさて問まりたく存ける今のおはし上座におもせし貴き御人ハいかなる
ある人なかまりくだされおはしますやと云く。かの貴人ハこれぞ皇帝太上老君にて

おそしまをて汝かしこげなくも吾に拜しあまた年を得たりし是をもて
童子におほせて鉋鑽鑿鋸斧鎚。すべて工匠の具どもをとりそろへて墨縄が
まへにならべさせて此度の労に汝に是をあたふるなり。此具をもつて物を作
らんには汝が手業今までに百倍して其妙をつくすべし。又墨縄よろ
こびに堪ず。逕に志ざしておほくたびぬかづきてをがむ。さて帰るには、かぞくりてこ
なりがたき神仙に逢まゐりぬる事生涯のよろこび是に過るものなし。ゆるさ
れて尊名をば何と申すぞといへば老仙のいはく汝に何をかつゝむべき吾は
かの国にひとしありて姓は公輸名は班といふものなり。魯國にて生
るれば人みな是を呼て魯班と称したりき。我生人間にある時工匠のわざ
を好みて大なる物は殿閣楼台橋梁さては小なる物は舟車器皿の類を作
るに人其巧をおどろく神と生ずる者なりき。後に世をいとひて

高唐雲夢の間に隠れ終に蓬莱に到て吾を迎めらう汝が道にかしこく
且志の直なるに感じてかく呼むかへて此具どもを譲りつたへまゐらす。汝塵
世に立かへりても仙界の事を以て必ず人にむかひて語るべからず。又かの男女
の仙にめぐりあふとも仙人の種根なりといふ事此諸り告べからず。又墨
縄あるに思ひけるは我を秘して語るまじき事なれど松光めしら人間にめぐらさて事
あやまりしと心中に思ひめぐらしけるを魯仙はやくさとりて汝がやゝつまぐる
男に口ぎぬなきやうなれどもいさゝかさん八一定せり。かくては我たらふべき
むねあり。汝心をつくす事なかれ。夜も更ぬ。つかれつべし。いねよとて
いひておくさるゝつゝ。墨縄松光をよびてかくなんとしらしめ。おのおの耳に
なる所にて、志かし眠りたるに。翌暁早く魯仙の声して、とく起出て用意せよといふ
声に月をひきまでふすに。魯仙あらはれ童子ら両三人ら、こちらに立てあり

蓬莱山にて
男女の仙人を
罪に行るゝところ

おどろき起たちて昨日のあやしき物がたりをつくづくおもひみて墨縄魯仙を拝して有がたき恵みを蒙りし事のべつくすべきかたもなしといへば魯仙答ていはく汝等はづかに一昼夜をすごしぬれども人間世にては十五年をかさねたりすごしぬとくいそげとて童子に命じて案内させて魯仙中門まで送りて再び七十年をすごして汝はまた来りて我と共に道を修せよといひてつらなりを出しぬ墨縄あまりのふしぎさにつゝ童子をさきにたてゝ出て行きゆきぬるにきのふ来りし時さらざりし峻しき山をこえてゆけばやがてほとりにまへのけふしきにおもなくおぼえしの猿子坂あるあたりにて童子がいはく此坂を下りなば汝が家ちかきにありとなんいひて是よりかへりいなんぞとて我は此道へゆくぞと見えたるがたちまちかくれうせぬ松光ハおもりて仙人は五穀を断てかくやすらかに世をすごすにありしなり米の價のたかくのぼりける此ハ仙人にてはあらじと思ふまでつぶやくさて坂をおりてあやしかりし大の樹の根もとまりかけて体を休め松光ハひろひたる大きなる椎茸をとりて一つかみ物ほしき心地もせざりし下になりてからくこのあたりさびしきにおもちあはれきのふの物しらべはやひしかひさゝ仙界なしあらひえし単に餓したりしけるはどもにかくいひつれど餅も今はめでたく喰ひて墨縄ハ立ていさゝか物たべきまはち汝もすくぞ喰へといふに松光ハよろこびてさらくゝちひつゝ口に飯餓を告おのづからちがひありてよくぞおぼえぬまゝにおもはず声をたてる物なりとぞ舌ハ痺るくみちみち行きて咽の中へいるやいなや気を立て眼をくるめかせて手足をのばえてさらに墨縄も驚きていかにせんと背をなでさすりてたゞわがきり早くのまして指を口もとにあて吐かしむるのとありさてハ物の毒にあたりしへたちまちあつく

のミあり耳にハ呼ぶこゑやうのへだてしらずつく墨縄もあとかたもなかりしが。つくづく
おもふに曽仙のの然ひしハかまへ六口さがなき者ありまじき法ありとの然ひし。
翁ハ仙界のさるをかまへ語らせしとてかまを唾して志めつらむやとのへだて。松
光うしめらげに山のかたを見やりて玉のやうなる滝だにおちてし。墨縄なぐさめて
いろハ八海心をあらため仙道に帰依しみづから人の短にもいたさるべし仙人
おもねとなりて。ふたたび物はまんやうにたちかへるべし。志きりに思ひ
てありしにさかしくとまりしこころへて引らうまの松光ハの叫あまた取て
山のかたへうちあげて目を大きく見ひらきてうちみちあれど。みうの出ねだ
口をひろげにお見かへりつつ墨縄を手をひきまして。あやしき道をまだいそぎたる。
さて墨縄ハともかく松光をいさなひて行けど。ならべある松の並樹ある下の
いとりねさうらぞ我すめる里にちかくして道をいそぎたる老人のめの

ども出来て手をうちて墨縄ぬしありきねとて。あきまへるさまにして。そこハ
いかにして此十五年をわりいづくに行て住ぬひし。などて。ふる里にハ爺を
ぶらすおあしぬすみぎりしまづ村なきのゆゑに告すやなどいひてしらべぐ墨縄
いたくなくありし父母の菩提のために國々の寺々を遍ありめぐりて。さそかく
年月をふるつといふへて来て我家に到りて見るにいとく荒たれど家に
昔のまゝにもちてあり庭にハ草おひしげりて秋のむしなくありやかくまさき
つくろひて入居しけるが。かくて日をふるまゝへきあるぞて此類をもち行て。かの
仙人のおしへを尋ねて見るまでやと思ひて橋の具なども取りおさめてあの
處なる一村の者かもよくいと面あひして松光にかたらご荷をたせて。あづまの
方へぞ出しもち。かる此松光がさこなたよりも手をふれひをえせず一字をもよまみ
つきまくへさりなまたでし唖にありてより我思ふ事をなくにまかせるまゝかなはず

いそぎかんなを文字(もじ)などほりたるをけづりて頭(かしら)かきて悔(くや)みけるとぞ

飛騨匠物語巻之一終

四十三年の冬
東京古書店にて
もとめぬ
雨のふる日なりけり